

第2章

立命館大学の学びの特色

大学における「学び」(課外・自主活動・学生生活)

本書の第1部は、立命館大学が学生の「学び」を進めるための大学を作ってきた歴史と現在を示しており、第2部は、みなさんが大学生になるための援助となるものです。

産業社会学部 教授 長澤 克重



■ 「勉強」と「学び」

大学に入学されたみなさんは、大学での学びをどのようにイメージしているのでしょうか? 「学び」というよりも「勉強」という言葉の方が馴染み深いかもしれません。「勉強」という言葉からは、試験のために教科書に書いてある内容(正解)をそのまま暗記するイメージが浮かんできます。高校までは、教わるべき科目やそこで学ぶ内容があらかじめ定められていたので、みなさんは「勉強」に取り組んでいましたが、大学とは、将来なりたい自分という目標に向かって自主的に学んでいく場です。大学では、「自分の成長のために自主的に探求する中で、知識・経験を身につける」という「学び」へ転換すること、専門的知識や技能の修得だけにとどまらず、人間的に成長するための「学び」へ視野を広げて欲しいと思います。

■ 正課における学び

大学での授業の基本は、講義(教室における知識の伝達)という形式で行われます。講義では、人類が長年の歴史の中で発見・創造してきた「知の体系」が系統的に教授されます。しかしながら、講義のような座学(教室で座って学ぶ)だけでは、専門的知識の深い理解と定着には不十分なため、実践的な授業が必要になります。具体的には、演習、実習、留学、インターンシップ、サービスラーニングなどの形式の授業があり、このような実践的な学び方は、アクティブ・ラーニング(能動的学び)といわれることもあります。講義科目に加えてこのような実践的、能動的に学ぶ科目に積極的に取り組むことで、正課での学びがより深まっていくでしょう。

立命館大学での学びの特徴として、学生同士の学びあいを重視していることがあげられます。基礎演習などの1回生を対象とする初年次教育では、上回生がオリター(エンター)、ES(エデュケーショナルサポーター)、TA(ティーチングアシスタント)として配置され、上回生と下回生の間で、あるいは同回生同士の間での学びあいが実践されています。このようなピアラーニング(ピア(peer)とは同輩、同僚という意味です)とよばれる教育スタイルが導入されている理由は、学生同士で教えあう、学びあうことによって、学生の学びがより深められ、学びが定着すると期待されているからです。

■ 課外・自主活動における学び

大学での学びは教室での学びにとどまるものではありません。クラブ・サークルやボランティアなどの課外活動、自主活動によって得られる学びも重要な意義を持っています。課外自主活動での学びは、教室での学びでは得ることのできない経験を含んでいます。それぞれの課外自主活動の現場では、正課で学んだ専門的知識・技能をより深く理解し、さらに実践的課題に応用し展開していくなかで、学びを一段と高いレベルに発展させることができます。

例えば、震災や洪水など被災した地域の復興支援のために、国内や海外で多くの学生がボランティア活

動を行っています。ボランティア活動を通じて、講義で学んだ人文・社会科学や自然科学の学問的知識を現場での経験と照らし合わせることによって、より深く理解するだけでなく、実践的に応用・展開する必要性を感じているでしょう。ロボットや自動車、ソフトウェアなどの研究会で活動する学生は、理工系学部で学んだ専門的知識を実践の場で深く理解し、実装するための応用的技能を体得していることでしょう。

正課と近い分野での課外自主活動だけでなく、文化・芸術・スポーツ分野においても、非常に高いレベルの活動を展開するさまざまな課外・自主活動団体が存在します。国内レベルのみならず、国際レベルにおいても高い到達点を目標として活動する学生は、課外自主団体の活動を通して深い学びを経験しています。各活動分野において個人の技量レベルを高めるためには、人並み以上の努力・工夫をはかる必要があります。集団的活動を必要とする分野では、チームや団体を集団としてまとめあげ、目標達成に向かって統率していく力量が必要になります。クラブ・サークル運営を円滑に行うためには、実務的力量も求められます。また、他大学の学生団体、ときには自治体や企業といった社会人との交渉・調整も必要になってきます。こうした経験を通して、学生はコミュニケーション能力をたかめ、人間関係と社会関係を築いて維持・発展させる総合的な人間力を高めていくのです。課外自主活動での学びは、実社会で必要とされる力量形成の契機となるものであり、立命館大学が課外自主活動を重視し奨励している理由はここにあります。

正課と課外活動の両輪によって大学での学びは一段と高いレベルに到達しますが、正課と課外活動を両立させることが前提であり、学業をおろそかにして課外自主活動でいかに高いレベルに到達しようとも、学生の本分を見失った逸脱した状態といわざるを得ません。課外活動で多忙な学生にとっては、正課と課外活動を両立させる自己管理能力がとりわけ必要です。絶対に両立を果たすという高い意欲と少々困難にくじけない忍耐力が必要ですが、他方で時間管理をうまくするための工夫やスキルがないと、精神力だけでは続かない場合もあります。立命館大学では、自己管理が苦手な正課と課外活動の両立に苦労している学生をサポートする SSP (Student Success Program) というプログラムがあります。SSP の利用については各キャンパスの学生オフィスに尋ねてみてください。

■ 包括的学習者支援

立命館大学では、正課で幅広い知識や専門的な素養を身につけ、課外自主活動で Border (境界) を超えて主体的に学ぶ力を身につけることで、学生生活全体を通じて学生が学び成長し、学ぶ主体として自らを確立することを目標としています。このような学びを目指した教育の仕組みを「学びの立命館モデル」とよんでいます。そのために、正課と課外の枠を超えた自立した学びと学びあいを学生が展開できるよう、さまざまな支援を行っています。制度的、財政的支援については、入学時に配布された学生生活に関するパンフレット、大学のホームページなどに詳細が書かれています。

また、学生生活に困難を感じている学生、多様な悩みを抱えて支援を求めている学生に対しても、学生サポートルームや障害学生支援室でサポートを行っています。

このような包括的な学習者支援については、本書の第2部以下で具体的に説明されています。大学生は自分自身と向きあい、他所と交流しながら、多くのことを学び成長していきますが、その過程ではさまざまな困難・障壁を乗り越えなければなりません。第2部を読めば、そのようなハードルをクリアするためのヒントが見つかるはずです。

本書を有効に活用することで、新入生のみなさんの学生生活が順調にスタートすることを願っています。

SSP についてはこちら！

Web サイト→ <http://www.ritsumei.ac.jp/ssp/>



立命館大学の学びの仕組みとピア・サポート

大学での学びは、授業を基本としながら、「学びのコミュニティ」を大学の内外に広げていく営みです。これは、社会的な課題への認識の深まりと学び合う人間関係の広がりを意味します。その土台となる立命館の小集団教育とピア・サポート活動を発展させていきたいと思います。



教職研究科 教授 春日井 敏之

立命館大学で学ぶ意味と「学びのコミュニティ」

立命館学園で学ぶ意味について、2006年に定めた立命館憲章のなかでは、次のように述べられています。「その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、『未来を信じ、未来に生きる』の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める」。建学の精神とは、「自由と清新」であり、教学理念とは、「平和と民主主義」を指しています。つまり、批判的・創造的精神をもった学問研究の自由に基づき、平和、人権、貧困、環境、エネルギー、教育といった人類的な諸課題に対して、それぞれの学部、研究科における教育、研究を通して貢献していくことを、学園として明確にしてきたのです。こうした基本方針を具体化していくために、教育と研究の内容や仕組み、学生生活の改革・改善について、大学の「全構成員自治」の考え方にに基づき、議論が積み重ねられてきました。そのための協議の場を「全学協議会」といいます。全学協議会とは、大学という「学びのコミュニティ」を構成する学部学生(学友会)、大学院生(院生協議会連合会)、教職員(教職員組合)、常任理事会が、教育、研究、学生生活の諸条件の改革・改善に主体的に関わり、協議するために設置された機関です。2018年度には全学協議会が開催され、協議の結果は「全学協議会確認文書」としてまとめられました。2019年度は、学費問題の検討を含めた全学協議会が開催されました。

立命館大学には、全国各地から多様な能力と個性をもった学生が入学してきています。また、世界各国から意欲的な留学生も多く受け入れています。学生たちは、正課の学修・研究を中心としながら、サークル活動、ボランティア活動などの課外自主活動やインターンシップ、海外学習プログラムなどを通して多様な体験を重ねています。本学の学生自治組織である学友会が、新入生を対象に行っているアンケートによると、「大学でやりたいこと、望むことは何ですか」という問いに対して、2010年度に行った調査では、①高度な専門の学び(29%)、②幅広い教養の学び(17%)、③他の学生との学び合い(16%)、④自身の生き方・キャリア形成(13%)といった結果が出ています。学生たちが、総合大学の強みを生かした幅広い教養分野と深い専門分野の学びへの期待をもって入学したことがうかがえます。同時に、それが正課や課外も含めた教職員や友人との出会いと交流のなかで深まっていくことを期待し、自分の生き方につなげていくことを真剣に考えている姿も見えます。

他方では、学修への不適応、学力問題、友人関係の脆弱さなどから、学びの目的や意欲を失ったり、ひきこもってしまったりするケースも少なからず生まれています。経済状況が悪化するなかで、学費や生活費のためにアルバイトをせざるを得なくなり、生活リズムを崩しているような学生も見られます。本学では、このような状況のなかで、正課と課外を含んださまざまな「学びのコミュニティ」を通してお互いを

参考文献

- 立命館大学「2019年度立命館大学全学協議会確認文書」(<http://www.ritsumeit.ac.jp/features/zengakkkyo/2019/>)
 中野武房・森川澄男・高野利雄・栗原慎二・菱田準子・春日井敏之(編)『ピア・サポート実践ガイドブックQ&Aによるピア・サポートプログラムのすべて』ほんの森出版 2008年
 春日井敏之・西山久子・森川澄男・栗原慎二・高野利雄(編)『やってみよう!ピア・サポート』ほんの森出版 2011年

認め合い、「学び、かわり、わかち合う」関係のなかで個人と集団がともに成長していく仕組みをつくっていくことを重視してきました。「学習者中心の教育」を軸にして、ラーニング・commons(学習図書館・グループ学習の場)、スチューデント・commons(交流の居場所)、自習室(個別学習の場)を、全学と学部レベルで発展させていくための検討を重ね具体化を図ってきました。

■ 立命館大学の学生の強みと学びの展開

このような学生実態と「学びのコミュニティ」を生かした4年間(薬学部薬学科は6年間)の学びの展開を検討する際に、本学の学生の強みとして、次の3点をあげることができます。①4年間を通した小集団教育(基礎演習、実習・講読、演習など)を通して獲得する集団としての教育力と個の成長、②オリター(オリエンテーション・コーディネーター)、またはエンター(援助担当者)とよばれる学生スタッフなど、さまざまな学生のピア・サポート活動を通した相互の成長、③学生の課外活動への参加率の高さと、正課と課外の枠を超えて社会とつながるアクティブな学びによる実践力の獲得です。たとえば、学生部調査によれば、2018年度の学内のサークルなどに所属する課外活動への参加率は61.4%と高く、増加傾向にあります。これ以外にも、学外のサークル、NPOなどに所属し活動している学生も少なくありません。

多様な学生を受け入れているなかで、大学に入ってから伸びしろが大きい学生をどう育てていくかが、大学の社会的責任となっています。そのために、学生と教職員が全学的な議論を重ねながら、次の3点を大切にしていくことを確認してきました。1つには、初年次教育において高校から大学へのより主体的な学びへと「学びの転換」を図ること、2つには、小集団教育を軸に専門を深める4年間の「学びの展開」を図るための仕組みをつくること、3つには、自らの学びを「社会とつながる学び」として位置づけ、意味付けをしながら卒業研究や卒業後に生かしていくことです。卒業後の社会へのかかわり方を意識しながら、自らの学びの集大成として卒業研究、卒業論文、卒業制作等に取り組むことはたいへん重要です。「卒業研究(論文)」が必修とされているのは、現在は理系学部や文学部・映像学部・スポーツ健康科学部・総合心理学部・産業社会学部等ですが、それ以外の学部においても必修化、あるいはそれに代わる学びの達成度検証が可能なシステムの構築が検討されています。

しかし、大学に入学したばかりの新入生のみなさんにとっては、学習の目的や将来のキャリア像も未確立であったり、また高校までの学習履歴と大学で要求される学力との関連も意識しにくいと、4年(6年)間を見通した学びをイメージすることには困難が伴います。そのために、たとえば、大学での学習の前提となる知識の修得に関して、高校の課程が未履修であればその回復・補習のためのリメディアル教育があり、学習の技術や方法について身につけるためにはアカデミック・ライティングをはじめとするアカデミック・リテラシーに関連する科目があります。さらに、大学での学びと社会とのつながりに関しては、教養科目のなかで、地域社会における活動体験を通じて学ぶ「サービスラーニング」科目、自らの卒業後の生活と職業とを構想、体験する「キャリア教育」科目、「インターンシップ」科目等があり、総合大学としての強みを生かした学びや学び合いの場が展開されています。

また、さまざまな心身の障害や発達課題を持つひと学ぶことができるような施設や制度の充実も求められています。たとえば、2011年度には、大学における学習や人間関係などに困難を抱える学生支援のために「特別ニーズ学生支援室」が発足しました。多様な学生・院生や教職員が互いを理解し、必要ときに支援を行うことで、立命館大学という学びのコミュニティをより充実したものにしていく必要があります。なお2016年度からは、「特別ニーズ学生支援室」と後述する障害学生支援室が統合され、「障害学生支援室」として一体的な運営となりました。今後の課題として、発達課題をもつ学生へのピア・サポーターの養成が検討されています。

■ つながって生きる力とピア・サポート

私たちの心のなかには、家族や先生や友達など、周囲の人々の「お世話」になりながら育ってくるなか

で、「できることで、誰かを助けたい」「誰かのために役に立ちたい」といった人間としての素朴な願いが、育っていくのではないのでしょうか。つながって生きる力の大切さが指摘されていますが、具体的には、「誰かを助けること、誰かに助けてもらうこと、楽しいこと・やりたいことを誰かと一緒にすること」を通して、人はつながっていくのです。ここに、ピア・サポートの原点があるのではないのでしょうか。さらに、思春期・青年期は、受け身で誕生したいのちが、人生の主人公として主体的に社会とつながって生きようとするからこそ、「第二の誕生」と呼ばれています。「誰かを助けたい」「誰かのために役に立ちたい」といった気持ちは、「働くこと(職業選択)、愛すること(性と生)、社会参加すること(仕事以外)」という3つの課題の実現に向けた模索を通して具体化されていくのです。

ピア・サポートとは、仲間による支援活動を意味し、移民を多く受け入れているカナダで1970年代に、レイ・カー(Rey Carr)の指導で始まりました。その後、トレバー・コール(Trevor Cole)らによって、小中学校や高校におけるトレーニング・マニュアルが具体化され、広まっています。こうした実践は、アメリカ、オーストラリアなどの多文化社会で広まり、ヨーロッパやアジアにおいても取り組みが始まっています。その対象は、小中学校・高校の子どもたちだけではなく、大学生、地域、会社、高齢者、障害者など、さまざまな分野で活動が展開されています。なお、学校における具体的な取り組みとしては、ピア・サポーターの組織化、自己理解・他者理解・傾聴・コミュニケーション・問題解決・対立解消法などの支援スキルのトレーニング、具体的な援助計画、援助・相談活動の実施、ふりかえり(交流、評価)といった内容で実践が進められてきました。

トレバー・コールは、ピア・サポーターの役割については、次の例をあげています。「チューター(学習支援者)としてのピア・サポーター」「特別な友だちとしてのピア・サポーター」「立ち寄りセンターのピア・サポーター(特別な教室を利用)」「グループ・カウンセリングとピア・サポーター(スクールカウンセラーと一緒に)」「問題を解決する、対立を調停するピア・サポーター」「新入生のオリエンテーションとピア・サポーター」などです。ここからは、学校におけるピア・サポートの多様な可能性をうかがうことができます。

■ 立命館大学におけるピア・サポート活動

本学では、全学的に初年次教育の中心に「基礎演習・研究入門」という30名程度の小集団教育を位置づけています。ここでは、各クラスに2、3名配置され、新入生の「学習、学生生活、自治」を支援するオリター、エンターとよばれる2、3回生のピア・サポーターの果たす役割が大切になっています。また、授業を補助する大学院生のティーチング・アシスタント(TA)や上回生が自らの学びを踏まえて支援するエデュケーション・サポーター(ES)などのピア・サポーターには、後輩に学びの姿勢や方法を伝えていくことが期待されています。オリター、エンターの募集と研修は、12月～3月にかけて学部単位で行われ、合宿なども含めて5、6回の研修会を自治会とオリター・エンター団、学生部と学部の担当教職員が連携、協働しながら進めています。

2019年度は、新入生が約7,500名に対して、オリター、エンターは、自主的な応募によって619名が登録されています。これは、新入生約12名に対して1名という高率であり、前年度の先輩によるピア・サポート活動を受けながら、次年度に立候補してくれるという学園文化が形成され、学生、教員、職員の努力によって定着してきています。この取り組みは、1992年より全学的に制度化されてきました。具体的なピア・サポート活動としては、4月のガイダンス期間の新入生クラス懇談会開催、履修相談、基礎演習への授業サポート、進路・学習相談、学生生活へのアドバイス、新入生歓迎祭典の企画、クラス交流会・合宿の企画、ゼミナール大会支援など、多様な支援を行っています。授業とは別に、自主的な運営に任されているサブゼミアワーが週1コマ設置されており、オリター、エンターも参加して、クラス交流、基礎演習における報告や新入生歓迎祭典企画の準備などに活用されています。また、毎年5月には、オリター・エンター団によってフレッシュマン・リーダーズ・キャンプという交流合宿が各学部で企画され、オリター、新入生、教員、職員が参加しています。2007年からは、実習を伴う新たな教養科目として

「ピア・サポート論」が全学を対象に開講されました。こうした取り組みが、支援スタッフの研修の場となるだけではなく、学園文化としてピア・サポート活動の裾野を広げることにつながっていくことを期待しています。

また、本学の障害学生支援室は、2006年に設置され、主として、視覚・聴覚・身体に障害をもつ学生を対象に、本人の要請に応じて、正課授業を受けるうえで必要な修学支援を学部事務室などとも連携を図りながら行ってきました。支援活動の中軸には、ピア・サポート、ピア・ラーニングを位置づけ、学生による学生への支援を行っていくことで、双方の成長を図っていくことを重視してきました。この理念は、「主役力(障害学生)」「主役力(サポートスタッフ学生)」「裏方力(障害学生支援室職員)」から構成された実践的な支援モデルに象徴的に示されています。とりわけ、サポートスタッフ学生の多様性を尊重しながら、経験を積んだ学生を学生コーディネーターとして位置づけ、サポートスタッフ学生どうしやサポートスタッフ学生と障害学生をつなげていく取り組みは、障害学生支援室の特徴的な到達点といえます。

2019年度は、サポートスタッフ学生は46名登録され、障害学生への支援を行っています。ノートテイク、パソコンテイク、車椅子補助などの支援ケースに対しては、複数のサポート学生によりチーム支援の体制を組み、1名の学生コーディネーターが配置されていくのです。サポート学生に対する研修講座は、障害学生支援室職員と先輩サポートスタッフが協力し、その年に必要だと考えられる講座が開講されてきました。このように、障害学生支援室における取り組みは、双方の学生が、学習や大学生活において「主体と主体」として成長し、自分の人生の主人公になっていくことを支援の目的としています。(立命館大学障害学生支援室編『学生のチカラーピア・エデュケーションの視点でみる障害学生支援』2011年)。

最後に、オリター・エンター団の活動に絞って、ピア・サポーターとして成長していく姿と後輩へのメッセージを一部紹介しておきます。(立命館大学学生部・学友会編「立命館大学オリター・エンター活動—学生ピア・サポート組織活動紹介」2017年)

▶ 社会でいきるオリター・エンター活動

私は学生時代3年間オリター・エンター活動に携わりました。学部の団員として、企画の立案・実施に取り組み、「仲間と共に何かを達成することの素晴らしさ」を感じた1年目。執行部として団の運営をする中で「組織の課題を解決していくことの難しさ」を学んだ2年目。全学部を中心として「新しい可能性を考え、取り組んでいけることの楽しさ」を覚えた3年目。この3年間で私自身大きく成長することができましたし、かけがえのない仲間にも出会うことができたと思っています。

現在私は保険会社で業績管理や企画の立案といった業務に取り組んでいます。個人情報を取り扱うことも多く、自分の活動の先には何万人もの職員やお客さんがいるため、責任も重いですがとてもやりがいのある仕事です。まさに自分たちの活動の先に多くの新入生が待っているオリター・エンター活動と同じで、日々自分の言動を振り返り足りないことが何かを考える毎日です。また、仕事の中で様々な年代の上司とコミュニケーションをとることや同期と切磋琢磨しあう機会も本当に多く、オリター・エンター活動での経験は現在の生活にも色濃く残っています。

私が思うオリター・エンター活動の1番の良さは「多様性」です。これから活動を始める皆さんは、時には仲間とぶつかり合い、憧れる先輩に出会い、新入生の道標となる中で大きく成長できるはずです。ぜひ、自分にしかできない素晴らしいオリター・エンター活動にしてくださいね。(2016年3月 経営学部卒)

● 考えてみよう

- あなたは、立命館の学生の強みや魅力は、どんなところにあると感じていますか。
- 新入生のみなさんに対して、先輩がオリターとして支援してくれていますが、どんなことを相談したいですか。
- 「社会とつながって自分を生きる」というのは、どんなふうに生きていくことでしょうか。

正課外での学び / 地域を学びの場とした活動 / サービスラーニング

立命館大学における正課外での学びは、地域を学びの場とするなど多様です。サービスラーニングは、学生たちが地域の人々との社会的な関係のなかで地域に貢献をする一方、地域からも学んでいく体験的な学習手法です。



経営学部 教授 木下 明浩

立命館大学における正課外での学び

正課外での学びとは、卒業や教職資格取得など必要な単位修得に直結してはいない学びのことを指します。「学生は自ら目標を立てて学修し、社会に積極的に貢献するための能力と知識を獲得して卒業することが求められます」(「2011年度全学協議会確認」)。大学での学びは、正規の単位修得に結びつく正課での学びを必要不可欠としますが、「正課、正課外、課外の大学生活全体を通じた主体的・能動的な学び」(「2016年度全学協議会確認」)をも意味します。

授業内外にわたる正課での学びは、正課外での学びの基礎をなします。正課での学びという土台のない正課外での学びは大学での学びとは言えないでしょう。正課で学んだ知識や理論、抽象的思考力、具象への応用力は、正課外での学びに生かすことができます。逆に、正課外での体験学習を通じて、正課で学んでいる内容の社会的意義、幅と奥行きを理解することができて、学習への動機づけが与えられます。正課と正課外の枠を越えた学びを通じて学生は主体性と社会的能力を伸ばしていきます。

立命館大学における正課外での学びを制度面からまずは取り上げてみましょう。学術活動を例に挙げますと、学術部には32の学術公認サークル、7の同好会、7の任意団体があり学芸総部には22の公認サークル、7の同好会、19の任意団体があります(「立命館大学ウェブサイト」2017年7月31日閲覧)。各団体では、それぞれの特徴を生かして、立命館大学の外に出て、全国的な大会で日頃の成果を発表したり、フィールドワークに出かけたり、ボランティア活動をしています。大学の中にあっても、成果発表に向けて地道な勉強会をするなど、集团的・社会的な学びを実践しています。ただし、集团的な学習活動も個人の地道な学び抜きには成り立ちません。

正課外活動は、学術部と学芸総部の公認団体・同好会・任意団体、スポーツ活動を担う体育会公認団体・公認同好会、立命館大学応援団などの中央事業団体、自治会(自治委員会)や各学部学生委員会などの中央パート、課外自主活動団体(登録団体)によって担われています。およそ20%の学生が、大学の把握している課外・自主活動に参加しています(「立命館大学ウェブサイト」2017年7月31日閲覧)。

正課外での学びの2つめの例として、サービスラーニングセンターの募集するボランティア活動、学生のボランティア活動を支援する学生コーディネーターの活動を挙げることができます(「立命館大学ウェブサイト(<http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>)」を参照のこと)。たとえば、2016年度は一例として資料1のようなボランティア体験プログラムが実施されています。学生の気づきや学びが以下のような声に表われています。「嵐山のきれいな竹林がたくさんの人たちによって守られていることに気づけました。また、ありがとう・お疲れ様と通りすがりの人に言われるととてもうれしかったので声を掛け合うことの大切さ

参考文献

- クレイトン・M・クリステンセン他 『イノベーション・オブ・ライフ』 翔泳社 2012年
 桜井正成・津止正敏(編著) 『ボランティア教育の新天地—サービスラーニングの原理と実践』 ミネルヴァ書房 2009年
 門脇厚司 『社会力を育てる—新しい「学び」の構想』 岩波新書 2010年

にも気づくことができました」などです。

資料1 サービスラーニングセンター主催のボランティア活動の一例

▶ ボランティア体験プログラム(連携団体：小倉山百人一集の会)

実施日時：2016年9月11日(日)

実施場所：京都嵐山

活動内容：竹林の整備活動や穂垣の補修作業など山の景観保全活動

■ 地域を学びの場とした活動

大学生の学習方法は、個人学習、学生どうしのグループ学習、教員と学生とのディスカッションなど多様です。地域を学びの場とする活動は、地域の人々との社会的かつ互恵的な関係の中で体験的に学ぶことであり、学生は大きな成長を得ることができます。

本学サービスラーニングセンターによる正課外プログラム、「大船渡夏まつり・盛町七夕まつりサポートプロジェクト2015」は、岩手県大船渡市と復興支援に関する協定を締結し、大船渡夏まつりサポートを中心に復興支援だけではなく地域活性化の取り組みを行う企画です。立命館大学生27名が2015年夏に、活動日6日間のボランティア活動を岩手県大船渡市盛町にて行ないました。ボランティア活動への準備と成果確認として、オリエンテーションと毎日のふり返し、そして最終ふり返しをしています。現地での活動前後に、大学にて事前学習と事後学習があります。

学生は、震災についての理解、復興支援活動のあり方、現地の方とのコミュニケーションの心構えなど、震災および復興支援に関する知識と認識を深めました。重要なことは、学生が具体的な提案・計画・実行をしていったことであり、それは学生の社会的な学びを育む上で意義深いものとなりました。しかし、住民の方に参加してもらえない、被災住民のお話は学生には受け止めきれない内容も多いという困難な状況にも直面したことについて、学生どうしがふり返しをするなかで、言葉に表現していきました。

地域住民の生活に寄り添いボランティア活動に取り組むことは、学生にとってどのような学びとなるのでしょうか。参加する学生は、①他の参加学生、②学生のボランティア活動を支援する立命館大学の教職員、③ボランティアの企画・受け入れ団体の職員の方、④地域住民のリーダーや一般の地域住民など多様な社会的関係性のなかで、地域におけるボランティア活動を学んでいきます。

学生は、活動を通じて、東日本大震災に対する思いや大船渡市盛町の課題である少子化やお祭りの担い手の高齢化に対する取り組みなど、そこに住む人々の思いに触れ、復興支援、地域活性化の意味について学びを得る機会となるでしょう。また他者との関わりの中で思うように進まないことも多いでしょう。地域住民の学生に対する反応や話しかけは、学生に対する新たな学びとなることも多いはずです。

学生は、ボランティアの企画・受け入れ団体の活動を身近に見る機会があれば、ボランティアの企画や受け入れに携わる組織の支えがあってはじめて地域におけるボランティア活動が成り立つことを学ぶことでしょう。ボランティア活動参加者の宿泊まりの確保などの物的な体制を整える必要もあります。また往復の交通費や怪我などに備えた保険など一定の費用もかかります。このようにボランティア活動には人的・物的・資金的な体制が必要であることを学生は知ることになるでしょう。

本学でも、立命館災害復興支援室が、2011年3月に起こった東日本大震災への支援を契機として設置され、学生のさまざまなボランティア活動を行う「後方支援スタッフ派遣」「学生が取り組むボランティア活動派遣支援」など、2017年3月までにのべ1,388名のボランティアを派遣し、復興に向けた取り組みを行ってきました。(詳しくは「立命館災害復興支援室ウェブサイト」(<http://www.ritsumeit.ac.jp/rs/20110311/>)を参照のこと。)

チーム内で活動内容の詳細を詰めたり、ふり返しを通じて学習したことと課題を言葉に出してまとめた

りするという点で、学生は、学生どうし、教職員、地域住民、ボランティア団体の方との言葉と行動のやりとりの中で、相手に貢献すると同時に、自らも相手側から個別的または集団的に学んでいきます。地域の中で学生が学ぶことの意義は、多様な社会的関係性の双方向のやり取りの中で、お互いが貢献し学び合うことを体験することにあります。

■ サービスラーニング

近年サービスラーニングという学習方法が大学で導入されています。サービスラーニングとは、地域での貢献活動を通して、学生が社会的な関係性のなかで学びと体験を深めることができる学習方法のことです。参考文献2（桜井正成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』10-11ページ）では、サービスラーニングの2つの特徴として、①「サービス(奉仕)を通じて、現実社会への何らかのインパクトを与えること」、②サービスラーニングは「たんなる体験ではなく、構造化された教育的取組である」ことを示しています。この指摘をふまえ、ここでは「地域での貢献活動」、「学生の学びと体験を深める学習方法」、「社会的な関係性のなかでの学びと体験」という3点について考えてみましょう。

第1の地域社会に対する奉仕は、サービスラーニングの不可欠な要素です。ここで取り上げた正課外での学び、「ボランティア体験プログラム」と「大船渡夏まつり・盛町七夕まつりサポートプロジェクト」は、「竹林の整備活動や穂垣の補修作業」ないしは「盛町七夕まつりの運営サポート、大船渡市での復興支援活動、地域の方々との交流」といった目に見える地域社会への奉仕活動を行います。その点で、大学授業における実習、インターンシップ、フィールドワークは必ずしも地域社会への貢献が必須ではない点で、サービスラーニングとは異なります（参考文献2、11ページ参照）。

第2にサービスラーニングは、学生の学びを促すようしくみが準備されています。事前学習では、相手先である地域コミュニティについての情報をふまえつつ、参加学生は、ボランティア活動の内容理解と、活動を通じた具体的な目標を立てます。ボランティア活動の修了直後、学生は、言葉に出して「振り返り」をすることで、体験を通じてはじめてわかったこと、当初の目標どおりできたことあるいはできなかったこと、思いがけずに相手から感謝されたりあるいは教わったりしたことなどを、自分自身の言葉で語り、体験から得た学びを言語化していきます。大学に戻って、たとえば1週間後には事後学習を行います。場合によれば、「自分の成長と気づき」「ボランティア活動を通して見てきた地域・社会問題」などの事後報告を文章にまとめることもあるでしょう。このように、サービスラーニングは「内省」(reflection)をすることでより深い学習効果が生まれます。

第3のサービスラーニングにおける「社会的な関係性のなかでの学びと体験」とは、学生が地域の人々に対して働きかけ貢献すると同時に、地域の人々から学ぶことを意味しています。地域の人々に即して言えば、彼らはボランティア活動の一方的な受け手であるわけではなく、地域コミュニティがボランティアを行う主体に対して知恵や勇気、感動を与えたり、社会的な問題関心を芽生えさせたり深めさせたりする点を見落としてはなりません。サービスを提供する主体とサービスを受ける主体が相互に学習し高め合う対等の関係性、すなわち互恵性(reciprocity)が、サービスラーニングにとって欠かせない視点です。

サービスラーニングという教育および学習の手法は、それぞれの学部で取り組まれています。また教養科目のC群(社会で学ぶ自己形成)の科目としても、「地域参加学習入門」など、2017年度は全学で6科目22クラス開講されています。正課外の学びとしても、サービスラーニングセンターは、短期のボランティア活動の学びや実施など種々の活動をしています(「立命館大学サービスラーニングセンターウェブサイト」<http://www.ritsumeai.ac.jp/slc/> 参照)。サービスラーニングは何も日本の地域社会に限定されるものではありません。世界の地域の人々との互恵的な体験学習を通じて、学生のみなさんは能動的な学びを進めていくこともできます。

■ 豊かな学びに向けて

最後に正課外での学びを別の角度から述べます。みなさんはなぜ立命館大学に進学したのでしょうか。大学卒業の肩書きを得て就職するため、または大学進学が当たり前になっているからなのでしょうか。アメリカの有名なビジネス・スクールの教授であるクレイトン・クリステンセン他が執筆した『イノベーション・オブ・ライフ』翔泳社(1つめの参考文献)は、経営学の理論を用いて個人の人生を考えています。ビジネス・スクールでの最終授業で教授は以下の3つの質問を学生に投げかけます。

- ・ どうすれば幸せで成功するキャリアを歩めるだろう？
- ・ どうすれば伴侶や家族、親族、親しい友人たちとの関係を、ゆるぎない幸せのよりどころにできるだろう？
- ・ どうすれば誠実な人生を送り、罪人にならずにいられるだろう？

クリステンセン教授は、一見簡単な質問に思えるが、教授の同級生の多くが一度も考えることをしなかった質問であると述べています(以上、1つめの参考文献、1-8ページ)。みなさん大学生は、人生の目的を考える重要な時期です。みなさんならどのように答えるでしょうか。

教授は、同書のなかで、「子どもは何のために、どのような問題を解決するために学校に行っているのか」と問うています。そのうえで著者は、「生徒に勉強を頑張るべきだとただ言い聞かせるだけでは、学習意欲を高められるはずもない・・・達成感を得ること、友人たちと一緒にものごとに取り組むことを片づける助けになるような体験を提供する必要がある」と述べています。大学生という自立した学習者の立場からとらえ返してみましょう。みなさんが望んでいることは、困難な学びに挑戦しての達成感、一緒に取り組むような学びに挑戦し真にお互い助け合えるような友達が、大学での正課・正課外での学びと体験を通じて得られることであるはずです。

またクリステンセン教授は、「リーダーが必要な能力をすべて生まれながらに備えている」わけではない、「むしろ能力は、人生のさまざまな経験とおして開発され、形成されていく」と述べています。学生には、地域社会の人々や学生どうし、教職員などとの学びを通して、将来社会に貢献できる能力を身につけていってほしいものです。

このような教授の問いかけは、正課での学びによって得られることもあるでしょうが、社会的な広がりをもった正課外での学びとも合わせてこそよりよく考えられ答えられるのではないのでしょうか。みなさんの正課と正課外での学びが、広がり深まっていくことを期待しています。

■ 考えてみよう

- ・ 1つめの参考文献を読んだうえで、本文に記した3つの問いに自分なりの答えをまとめてみよう。さらに、同じ課題をした学生どうしがグループを組んで話し合ってみよう。
- ・ 2つめの参考文献を参考にして、サービslラーニングという学習方法の良い点がどこにあるのか調べ、グループで話し合ってみよう。またサービslラーニングが効果を高めるためには、学生としてどのような点に気をつけなければならないだろうか。
- ・ 3つめの参考文献を参考にして、大学生の「学び」のあり方について自分なりに考え整理してみよう。そのうえでグループでお互いの意見を戦わせてみよう。

夢をかなえる「学びの立命館モデル」関連奨学金

スポーツ健康科学部 教授 真田 樹義



立命館大学では、夢を実現させるための奨学金が充実しています。これは他大学にない大きな強みの1つです。奨学金にはいくつかのタイプがありますが、いずれも大学で学ぶことを活かしつつ、夢を実現させようとする学生を支援するものです。奨学金に応募することで、あなたの夢が実現に、一歩近づくかもしれません。

■ + R 校友会未来人財育成奨学金～個人でかなえたい夢にチャレンジ！

校友一人ひとりの「未来の立命館は私が創る」という想いを繋ぎ、校友の支援で後輩が育ち、後輩の成長が母校を発展させる。+ R 校友会未来人財育成奨学金は、この校友会未来人財育成基金の理念に基づき、立命館が目指す「Creating a Future Beyond Borders 自分を超える、未来をつくる」を体現し、様々な問題解決の前に立ちどかる限界や制限を乗り越え、新たな価値を生み出す学生・院生を支援しています。

■ 学びのコミュニティ集団形成助成金(正課外活動)～グループでかなえたい夢にチャレンジ！

本奨学金は、キャンパス内外での正課外の多様な学びの集団形成を支援することを目的とした助成金です。学部内での学びの集団活動、学部を超えた多様な学びの集団活動、学外での学びの集団活動など、立命館らしい学びのコミュニティを増やしていくことを目指し、助成されます。

■ + R Challenge 奨学金～正課の学習を発展させて世界に飛び出そう！

+ R Challenge 奨学金は、各学部において正課の成績が優秀であり、学部の専門学習、全学共通教育、留学や国際的な学習を通して、問題意識を持ち、それを発展させて学習テーマを追求しようとする学生の学習プロセスを支援することにより、周囲の学生の学びと成長の規範となることを奨励します。国際的な研究者を目指す人もこの奨学金にチャレンジできます。

その他、正課外活動高度化・活性化助成金、アスリート・クリエイター育成奨学金、文芸・スポーツ特別奨励金などがあります。詳細については、採用学生による活動報告会への参加や、先輩学生から話を聞いたり、所属キャンパスの学生オフィス職員に相談したりすると良いでしょう。

あなたの夢が立命館大学での学生生活で大きく広がることを楽しみにしています。

＝学生の活動紹介＝

■ 学びのコミュニティ集団形成助成金(正課外プログラム)

2018年度には、単位修得を目的としない活動の参加費用の一部を補助し、正課外の学びと成長を促進することを目的として、「SDGs 実践プログラム in ラオス」を実施した。このプログラムは、ラオスの低地稲作農村地域をターゲットとし、そこから SDGs のテーマで



参考文献

立命館大学成長支援型奨学金・助成金 WEB サイト：<http://www.ritsumeai.ac.jp/scholarship/>
問い合わせ先：各キャンパス学生オフィス



との実情を現地で学び、視察や交流を通して、SDGs の目標を達成するために自分達ができるアクションについてグループで考え、実現したい理想の未来像を設計する。理系文系あるいは回生にかかわらず立命館大学の多くの学部学生が参加し、現地では教育や環境をテーマに大学や小学校、企業等を訪問し、交流を深めることによって、それらの問題点を持ち帰り、SDGs の目標を達成するための活発な議論と成果の報告が行われた。

■ +R 校友会未来人材育成奨学金

(2019年度)理工学部4回生 徳田 大佑さん(踏み出し支援)

BKC キャンパスがある草津市において、倉庫として利用されていた古民家や空き家をシェアスペースとして活用することで、地域課題の解決を推進するプラットフォームを開設しました。ワークショップやイベント等を開催し、コミュニティを醸成する場として認知してもらおうとともに、デザイナーやフリーランスで活動される方々を巻き込んで、新たな展開が生まれる場となるように活動しています。



(2019年度)政策科学部2回生 宮田 汐梨さん(高度化支援)

OIC キャンパスがある茨木市における災害に強い地域づくりを目的に活動しています。2018年度は地震や台風など大きな災害が起こり、茨木市においても防災の重要性が再確認されました。本活動を通して、学生が防災活動にかかわる機会を増やし、誰もが安心して暮らせる地域づくりに貢献したいと思っています。そのために、立命館大学の地域連携室と共同で茨木市危機管理課に企画書を提出し、岩倉公園を利用した災害時の炊き出し訓練や災害時の対応マニュアルを作成していきます。



■ アスリート・クリエイター育成奨学金

(2019年度)スポーツ健康科学部4回生 今井 崇人さん(スポーツ活動部門)

第87回日本学生陸上競技対抗選手権大会においては、男子10,000m で4位入賞(日本人2位)、第30回出雲全日本大学選抜駅伝競走では、関西の大学として9年ぶりの7位入賞を果たしました。2019年度の第31回出雲全日本大学選抜駅伝競走では、3区の区間で順位を1つ上げ、全体として2時間13分11秒の記録で、過去最高タイとなる6位入賞を果たしました。今後は、実業団に所属し、オリンピック出場を目指したいと思います。



(2019年度)総合心理学部4回生 鈴木 ひとみさん(文化・芸術活動部門)

七タそろばんワールド2018においては、高校・一般の部のフラッシュ暗算競技で優勝、平成30年度全日本通信珠算競技大会では、一般の部で団体準優勝、個人4位、平成30年度全国計算競技大会では、種目別(除暗算)競技で優勝を果たしました。2019年度においてもチャンピオンズカップ2019において個人優勝を果たしています。社会人になっても挑戦し続けるとともに、大会で出会う子どもたちにも強くなってもらえるように一緒に頑張っていきたいと思っています。



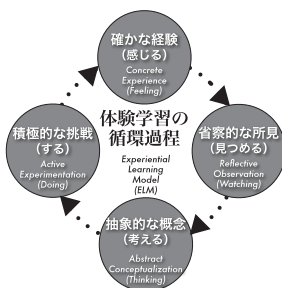
他者とともに学ぶサービスラーニング

共通教育推進機構 教授 山口 洋典



■ フィールドとデスクを往復するサービスラーニング

阪神・淡路大震災が発生した1995年1月、私は理工学部環境システム工学科の1回生でした。BKCの1期生の私は、同じく1期生だった政策科学部の学生らが中心となった「立命館大学ボランティア情報交流センター」の立ち上げに参加しました。若くて体力もあるから「何かできる」と思い、とにかく現地に駆けつけました。しかし、風景が一変してしまったまちで「何ができる」のか、すぐには言葉になりませんでした。



サービスラーニングも含めた「体験学習の循環過程」：ジョン・デュエイやクルト・レヴィンらの視点をもとにデイヴィッド・コープが提示した教育の哲学である。
(訳は筆者)

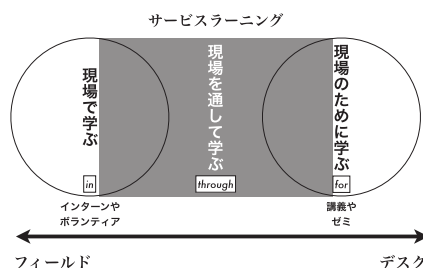
震災ボランティアでは「思考」と「実践」のバランスが重要だと身にしみて学びました。まず動いた後、立ち止まって考える、そしてまた動いて、また振り返って次の動きを考える、これを繰り返したためです。今思えば、こうして頻繁に机と現場とを往復する中で、目の前の他人(現前する他者)と、自分の中の他人(無自覚の自己)の両方に向き合っていました。そして、教科書では学べないことを学び、成長を実感できたのです。

このような大学と大学以外での学びを接続する学び方は「サービスラーニング」と呼ばれています。正課科目だけでなく、課外活動でも、こうした学びが注目されています。ちなみに、ボランティアやインターンシップと異なるのは、他者と共に学びのコミュニティを形成して問いを深める、集団による学び方であるという点です。そして、現代を生き抜く知恵を磨いていく教養教育の一環として、立命館大学でも積極的に進めています。

■ 自己完結から他者連結の学びへ

中学、高校とテニス部だった私は、サービスラーニングはテニスに似ていると説明しています。まずサービスを相手のコートへ打たないと、やりとりが進まないのです。先程の「机と現場とを往復する」という表現を重ねると、机に座ってどうすればよいか考えた私が、現場に打ち込んでいく、そして現場から返ってきたボールをまた返していく、そんなやりとりを重ねるのがサービスラーニングです。

ただし、実践を通じた学びとは、現場の相手を打ち負かす勝負事ではありません。もちろん、思考を研ぎ澄ますために机の上で激しく討論(ディベート)する、それぞれの価値観を調整し共有するために現場で熱く議論(ディスカッション)することもあります。ただ、討論も議論も、何より実践の現場でも、自分が正しいという思い込みを相手に押しつけては、互いにより関係を産み、育て、続けていくことは困難です。テニスで言えば、サービスエースばかり狙っては、そもそも枠から外れること(フォルト)の可能性が高まり、やがて相手は打ち返す気持ちが萎えるでしょうし、逆に「自分の答えは正しいだろうか?」「空気を読まない…」などと引っ込み思案になって相手にボールを打



サービスラーニングという学習方法の構図：サービスラーニングはフィールドでの学び(現場での学び)とデスクでの学び(現場のための学び)とが橋渡しされた学び方である。



京都でのサービスラーニングの例「時代祭応援プロジェクト」(平安構社第八社を通じて、維新勤王隊・江戸時代婦人列への参加)：1895年「京都の誕生日」を祝うために始まった、葵祭・祇園祭に並ぶ「京都の三大祭」の一つに2006年から、衣装の虫干し、楽器演奏や隊列行進の練習の受付補助を経て、当日の運営と終了後の片付けに携わる。

ち返さない場合も、ラリーが続いていきません。

サービスラーニングという学び方についての研究は英語圏で先行しています。特にメリーランド大学のバーバラ・ジャコビーが示した「省察(reflection)」と「互惠(reciprocity)」が学びの鍵という概念は日本でもよく知られています。こうした他者と共にある学びは次第に着目され、1999年3月に文部省高等教育局(当時)が「大学教育におけるボランティア活動の推進について」をまとめて以来、各大学で実践と研究が進みました。実際、立命館大学も、2005年の文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムへの採択を前後して、各種のプロジェクトが展開されてきています。

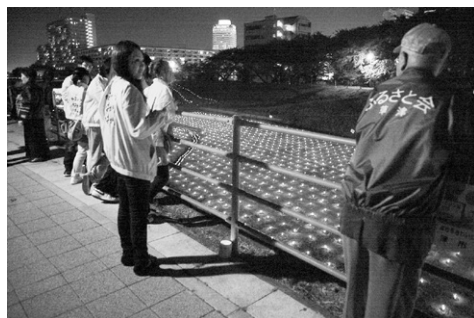
■ 生徒から学生への飛躍を支える「生活者」の視点

立命館大学がサービスラーニングを進めているのは、学習者が中心となる学びの実現のためです。教育者が中

心となった一斉の講義形式の対極にある学び方です。たとえば、衣笠キャンパスでは「時代祭」、びわこ・くさつキャンパスでは旧草津川での「街あかり」、大阪いばらきキャンパスでは「里山の活用等」の活動など、地域社会の動きに携わり、チームワークを築いていきます。そして、約半年にわたってフィールドとデスクを往復し、多様な人間関係を結びながら、自分を磨いていきます。

高校時代までは「生徒手帳」があり、与えられた「時間割」のもとで教えられる環境に身を置いてきたと思われます。これはテニスで言うところのレシーブの練習にあたります。自分に向いてきた問いに、どんな答えを出すかが問われるためです。ちなみに読書やノートの整理などの自習は、さしずめ壁打ちにあたるでしょう。

高校までの「レシーブ型」の教育、大学での「サービス型」の学習、その間を結ぶ「壁打ち」型の自習、これらがうまく重なると、学習者に生活者の要素が織り込まれます。それは現場に対して「何をどう学ぶか」と問いかけの中で、現場からは「誰となぜ生きていくのか」といった人生の目的や目標が問われるためです。つまり地域という学びの場では、教える側と教わる側という固定的な関係はなく、むしろ多様な人間関係を結びながら、お互いに大事な場所の未来をよりよいものにしていくことで、結果として学生は「生活者の見方」を身につけると共に、外から来た者だからこそ気づく視点を現場の方々に投げかけることになります。多彩な関係性の中での学び方、サービスラーニングにより、実践的に学ぶ立命館大学生が増えることを願っております。



草津でのサービスラーニングの例「草津街あかり・華あかり・夢あかりプロジェクト」(草津市役所商業観光課を通じて、草津街あかり・華あかり・夢あかり実行委員会に参加)：道路面よりも河道が高い「天井川」の一つとして全国に知られてきた草津川が、2002年に治水事業によって廃川となった後、河道をろうそくの灯りなどで彩る「草津街あかり・華あかり・夢あかり」が2004年から始まり、講義科目でのボランティア参加を経て、2010年から通年のプロジェクト化された。

グローバル化した社会における教育・研究

グローバル化は社会の間の壁を壊す一方で、増大した交通から新しい結びつきが生まれ、世界の多様性を育む。グローバル化した社会における大学の重要性は、そこに学ぶ者が他者に出会う場を提供することにある。



グローバル教養学部 教授 山下 範久

■ グローバル化とは

新入生のみなさんにとって「グローバル化」は、物心ついたときにはすでにごくあたりまえに見聞きする言葉だったでしょう。学問の世界において「グローバル化」が多くの研究の関心になったのは1990年代の半ば以降だと言われています。「グローバル化」をきちんと学問的に定義するのは容易ではありませんが、「ヒト、モノ、情報が国境をまたぎ、物理的な距離を超えて、地球規模で、より多く、より速く流通する傾向」であるとさしあたり理解しておいてよいでしょう。特に情報通信技術の発達はこの傾向を強く促しました。

グローバル化はそれこそグローバルな規模の政治や経済のあり方にも影響を与えていますが、私たちの日常生活にも浸透しています。たとえばみなさんはこれから講義で外国の文献を紹介されたとき、(授業や研究に必要な書籍は本学の図書館に当然そろっていますが)インターネット上の書店を通じて簡単に手に入れることができます。今でこそ当たり前のこの環境は、私が大学に入学した1990年にはまったく考えられないものでした。

当時本は(リアルの)書店で買うものでしたが、店頭で買える洋書はごく限られており、店頭にない洋書を購入するには洋書の輸入専門店を通して発注し、何カ月も到着を待たねばなりませんでした。そもそも洋書の新刊情報も限られており、輸入元が出すカタログを自分の所属学科の図書室に見に行くしかありませんでした。また輸入元が為替リスクを価格に転嫁していたため、国内で買う洋書は実勢レートで換算するよりもはるかに高い価格でしか手に入りませんでした。

いまではインターネットのサイトで新刊情報を公開していない出版社など考えられませんが、一度でもインターネットの書店で洋書を購読しようものなら、書店のほうから、「あなたにおすすめ」の新刊情報を(イヤだと言っても)ダイレクト・メールで届けてくれます。本の一部をネットで「立ち読み」できることも珍しくなくなりました。また為替レートは実勢にかなり近づきましたし、注文すればはやいものなら数日で手元に届くようにもなりました。

こうしたモノの流通のグローバル化の例は、もちろん書物に限ったはなしではありません。むしろみなさんが着るモノや食べるモノに純粋に国内で作られたものを探すほうが難しいでしょう。その意味では、みなさんにとってグローバル化はほとんど第二の自然のような所与の環境にさえなっているといえるでしょう。

■ 大学におけるグローバル化のインパクト

ただ特に大学における教育、研究との関連でいえば、ある意味でそうしたグローバルなモノの流通よりも直接的に重要なのは、ヒトや情報のグローバル化のほうかもしれません。大学の役割は人間が持つ知的な創発性(クリエイティビティ)を高めることにあるからです。

参考文献

- トーマス・フリードマン 『フラット化する世界』(上・下) 日本経済新聞社 2006年
ジョージ・リッツァ 『無のグローバル化』 明石書店 2005年
タイラー・コーエン 『創造的破壊』 作品社 2011年

グローバル化はヒトの移動性を高めました。私たちが生きる現代の社会を総体としてみれば、通勤・通学や旅行のような日常的・短期的なスケールでも、留学や出稼ぎのように人生のある特定の時期にかかるスケールでも、さらに元の居住地への帰還を前提としない結婚や定住移民のように人生全体にかかるスケールでも、ヒトの移動の度合いは過去のどの時代よりも高まっています。その前提に交通手段や通信技術の発達があるのは言うまでもありません。しかしこれは単にテクノロジーだけの問題ではなく、私たちの社会が選り取った価値の帰結でもあります。たとえば(両当事者の合意のみにもとづく)婚姻の自由や職業選択の自由といった近代的な人権は、移動の自由の低い社会では実質を伴いににくいものです。私たちが自分の人生により多くの選択肢を持つことをプラスと考え、それを促すようにさまざまな社会制度を作ってきたからこそ、そうした選択肢を増やす移動を支えるインフラが発達したのです。

大学教育におけるヒトの移動のグローバル化のひとつの典型は留学の増加です。たとえば立命館大学では、数週間単位の留学からもっと長期の本格的な留学まで、さまざまな留学プログラムが提供されています。特に本学がアメリカン大学及びサフォーク大学と提携して運用している DUDP(学部共同学位プログラム)という制度では、本学で2年間、提携先の各大学で2年間を学び、相互に単位認定を行うことで、最短4年間で2つの大学の学士号を同時に取得することができます。また2018年度からは国際関係学部にアメリカン大学とのジョイント・ディグリー・プログラムとして国際連携学科が開設され、さらに2019年度にはオーストラリア国立大学と共同で、学部全体がデュアル・ディグリー・プログラムとして設計されたグローバル教養学部が開設されました。航空券が安くなり、インターネットの普及などで出願手続きが容易になっただけでなく、大学の制度的な支援によって留学のハードルは劇的に下がりました。

では留学の効用はなんのでしょうか。みなさんの多くは語学の習得を留学の目的と考えているでしょう。特に近年、実務上の英語の運用能力が求められることが増え、就職活動を意識して留学を考えている学生も多いようです。それももちろん大事なのですが、もう少し長い目で見たとき、留学の本質的な効用は異文化に開かれる経験にあると思います。

私たちは自分が生まれ育った文化の中にいるとき、多くのことを当たり前だと感じ、当たり前だと感じていることにさえ気づかないまま、日々を暮しています。異文化での生活は、こうした当たり前の感覚が通じない相手(哲学的には「他者」と表現します)との出会いの連続です。それは決して楽しいばかりの経験ではないでしょうが、その経験から、みなさんは世界が決して単一の常識でできていないことを学ぶでしょう。その分だけ、みなさんにとっての世界は広がり、将来の人生において出会う他者に対して、より柔軟に、そして創造的に接することができるようになるでしょう。語学の力は、このように多文化社会を創造的に生きる力の前提として大切なものですが、逆にいくら語学に堪能でも、仲間内の常識に閉じこもって生きるだけならば、宝の持ち腐れとなってしまうかもしれません。

もちろん、こうした他者との出会いは、留学を通じてのみ可能なものだというわけではありません。2019年5月1日現在、立命館大学には70を超える国・地域から2,600名以上の国際学生が学んでいます。また本学には上述の国際連携学科やグローバル教養学部のほかに、すべての課程を英語で履修するプログラムとして、国際関係学部 Global Studies 専攻、政策科学部 Community and Regional Policy Studies 専攻、情報理工学部 Information Systems Science and Engineering コースがあり、国内外から多くの学生が学んでいます。その他の学部でも英語を教室言語とする授業が数多く提供されており、さらに2016年度からは初年度向けの教養科目や国際交流科目などを外国語で学ぶ「教養科目B群」が拡充され、入学当初からグローバル化を志向する学びがますます充実しました。学生諸君は、こうした正課における国際化教育を軸に、留学を含む正課外の機会、そしてグローバル化が進むキャンパスにおける日常的な場面での多くの国際学生との交流を通して、いわば他者に開かれた学びへの体力をつけつつ、自身のキャリアを見据えて、グローバル化した世界を生きる力をつけていくことが求められています。

さて、話を情報のグローバル化に移しましょう。情報のフローには媒体が必要です。テレビやインターネットはもちろんその代表ですが、多くの情報はモノやヒトの流れに付随しても拡散します。先に洋書の

例を挙げましたが、本はそれ自体情報の媒体であるとともに、物理的なモノでもあります。ゆえに本の内容ではなく、装丁や紙質が伝える情報(たとえば出版された国の文化的伝統や経済事情など)もあります。ほかにもたとえば、今日買った服のタグをみると名前も良く知らない国が縫製地だったとか、近所にネパール料理屋ができたから行ってみたら、お茶にバターが入っていて驚いたというようなことを通じて、みなさんは新しい情報に接しています。モノを通じて情報を得るには、そのモノの生産や流通、歴史についていくらかの知識が必要です。それは外国語を知らなければ外国の新聞を読めないのと少し似ています。逆に言えば適切な知的訓練を経れば——そのために大学はあるのですが——身の回りのあらゆることが情報として意味を帯び始めるということでもあります。

また、情報のフローはヒトを媒介にすることもあります。先に挙げたようにたとえば留学生との日常的なやり取りのなかからも、みなさんは多くの気づきを得るでしょうし、立命館大学には海外から短期あるいは長期で招聘される著名な研究者がたくさん滞在しておられます。そうした先生方は授業をお持ちの場合もありますし、講演会やセミナーも頻繁に開催されています。そうした機会は、まさにヒトのグローバル化を通じた情報のフローの拡大そのものです。もっと言えば、キャンパスの外でも、たとえば海外からの観光旅行者の振る舞いを見て習慣の違いなどに気が付く経験などはみなさんもおありでしょう。いわばヒトそのものが情報を運ぶメディアなのです。

ですから情報のグローバル化だけをことさら取り上げる必要もないかもしれませんが、それでも特に近年の情報技術の発達が社会にもたらしたインパクトは過小評価できません。私が大学でそれを実感するのは、図書館のデータベースを利用するときです。立命館大学の図書館は充実したオンラインで利用できる各種のデータベースを豊富に提供しています。たとえば新聞記事を検索するデータベース、法令や特許などを検索するデータベースなどがありますが、私が最もよく使うのは海外の学術雑誌論文のデータベースです。再々昔話で恐縮ですが、かつては海外の雑誌論文は、薄暗い図書館の片隅に設置された蔵書カードからまず配架先を探り当て、それから埃の積もった書庫に入って目当ての雑誌を探し出し、製本された重い雑誌の必要個所を1ページずつコピーしてやっと読めるものでした。運が悪いと、2～3本の論文をコピーするだけで1日過ぎてしまうこともありました。しかし今では大学のLANにつながったコンピュータからなら、大半の学術雑誌掲載論文がオンラインの検索結果からそのままダウンロードでき、すぐに読むことができます(しかも図書館では定期的にこうしたデータベースの使い方の講習会まで開いてくれています)。その気になれば、学部生でも自分の関心のあるテーマについて最新の研究成果を実際に自分で読んでみることができるのです。

■ フラット化と多様性の価値

論文データベースへのアクセスは、インターネット環境さえあれば物理的にはどこからでも可能です。情報技術の発達は、物理的な距離の障害を減らす作用があります。逆に言えば、地球上のどこにいても、少なくとも情報の受信・発信については、ダイレクトに世界の中心にアクセスできるということです。アメリカのジャーナリストのトーマス・フリードマンはこのことを「フラット化」と呼んでいます。

もちろん現在の世界における情報のフローが完全にフラット化しているわけではありません。特定の資格や一定の能力がなければアクセスできないものはいくらかでもあります。また誰もが世界の中心に直接アクセスできるということは、その分競争が激しくなるということでもあります。特に若いみなさんにとってそれは、まだ目標の定まりきらないうちから、孤独な競争に投げ込まれることを意味します。大学教育もそれに対応していく必要があります。しかしそれは、みなさんをただ厳しく鍛えることによって、むやみに保護することによっても果たされるものではありません。

フラット化した世界では、特定のゴールにたどり着くのに決められた順序で歩むべきルートが存在があいまいになります。教育はしばしば、教わる者をゴールへ導くガイドのイメージで語られますが、しかし今日教育の役割は、みなさんをゴールまで連れていくガイドというよりも、むしろみなさん一人ひとりに自分の目指すべきゴールを思い定めるきっかけを提供し、地図やコンパスの使い方を伝えて冒険に送り出すことに、

その本質を見いだすべきだと考えます。他方でみなさんは自分の進もうとする行先のイメージをふくらませ、われわれ大学の教員を含む他者にそれを伝える言葉を磨く努力を求められます。与えられたものを消化するだけ、他人から借りた言葉で意識の高さを誇示するだけでは、大学という場を活かすことは難しいでしょう。

グローバル化と言えば、しばしばそれが文化や社会の画一化・均質化を招くことを危惧する論評を目にします。教育においてもグローバル化といえば、TOEFLの点数や国際学力調査など、一次元的な指標で測られた能力の競争の問題に還元されて語られることが少なくありません。もちろん先にも述べたようにグローバル化がもたらす多文化社会において語学力が重要性を持つことは確かですし、大学での教育の前提として高校までの学びの客観的な到達度が重要であることも間違いありません。しかし、グローバル化は単純に世界を画一的な競争に追い込むものではありません。多くの社会学者は、グローバル化が均質化と多様化の両面を持つことを指摘しています。ヒト、モノ、情報のフローの拡大は、特定の文化による他の文化の駆逐を招くこともあります。多様な文化的要素の新しい結びつきからこれまでにない文化を生み出すこともあるからです。

経済学者のタイラー・コーエンは、こうした社会学的な一般論から一步踏み出して、グローバル化は社会間の文化的差異を小さくするが、社会内の文化的差異を大きくすると指摘しています。これは言い換えれば、オープンな競争のプラットフォームは、社会の壁を越えて相互に接続していくが、その結果として生まれる新たな文化的接触やコミュニケーションの機会を通じて、それぞれの社会のなかでは文化的な多様性が増すということでもあります。

社会間の共通化と社会内の多様化。コーエンの主張の力点は明らかに後者にあります。それは当然です。少し考えればわかることですが、もしグローバル化が画一化だけをもたらすのであれば、そのプロセスは次第に減速し、ついには停止するしかなくなるでしょう。差異がないもののあいだにコミュニケーションの動機はないからです。裏を返せば、グローバル化の過程は、互いに他者であるような多数の多様な存在が新たな出会いを繰り返すことを通じてはじめて、健全に進むものだということです。

ですから、グローバル化時代の大学において、みなさんに求められていることは、出来合いの基準での競争に自分を追い込んでいくことではなく、むしろ他者との出会いのなかで揺れる自分と向き合い、自分の立つ場所を見定めることです。その場所で自分はなにがしたいのか、あるいはその場所から自分はどこへ行きたいのか。それを考えたうえで必要があるならば、語学を学ぶことも、資格を取ることも、大いに有意義でしょう。

最後に、グローバル化を支える情報技術の進歩は、近年曲がり角を迎つつあるという指摘があります。これまでおよそ20年にわたって、たとえば電子メールの普及は個人間の通信を劇的に容易にしました。WWWの普及は情報へのフラットなアクセスを爆発的に増やしました。しかし近年の各種のクラウド・サービスやソーシャル・ネットワーキング・メディアの発達は情報空間を個人個人にカスタマイズする方向に進んでいます。端的に言えば、私が見ているツイッターのタイムラインとあなたが見ているツイッターのタイムラインはまったく別物で接点さえないかもしれません。それは自分にとって都合よくあらかじめ編集されたコミュニケーション空間でしかありません。情報技術を媒介としたコミュニケーションの比重が高まることで、むしろ人は意図せず内向きになりつつあるかもしれないのです。その意味で大学は、利害関係をさしあたり棚上げにしたところで他者に会う機会が埋め込まれた、数少ない場でもあります。そこで大切なことは、そうした他者と表面的にうまく付き合おうとすることではなく、むしろそこで不可避的に生じる違和感を創造力の資源へと変えようとする意欲です。

● 考えてみよう

- 政治や経済の領域におけるフラット化の例を挙げてみよう。
- グローバル化がもたらす均質化と多様化の両方向の変化のなかで個人のもつさまざまなアイデンティティがもつ意味は増すだろうか、減るだろうか。あるいはその意味自体が変わるだろうか。
- インターネットの発達はコミュニケーションを通じた相互理解をより深めるだろうか、それとも相互理解をより困難にするだろうか。

他者との出会いから創造する学び —立命館大学の国際化

国際教育推進機構 准教授 羽谷 沙織



立命館大学は、1900年に西園寺公望を学祖として創設して以来、1988年の国際関係学部開設を皮切りに、国際化を進めてきました。ひとつの社会のなかで異なる人種、宗教、言語を持つ集団と集団が平和的に暮らしていく社会のあり方を多文化共生と呼びます。立命館大学の使命は、多文化社会のなかで様々な文化的背景を持つ人々と共に働き、新しい価値を生み出す学生を育てることと考えています。そこで、本学では近年、多文化間共修を核とした新しいタイプの授業を提供しています。

ここで取り上げるのは、Cross Cultural Encounters (異文化との出会い) という科目です。これは、教養科目 B 群のなかの異文化交流科目として位置づけられています。学部の垣根を超えた全学共通の教養科目のなかで展開しているので、どの学部の学生も受講することができます。Cross Cultural Encounters の大きな特徴は、国際学生と国内学生が互いに学びあうことを目的としている点です。本学のキャンパスには、海外から日本へ学びに来ている国際学生が少なくありません。2019年5月現在、2416名の正規留学生および257名の短期留学生が本学の構成員としてキャンパスで学んでいます。これらの留学生と国内学生が混ざり合いながら、ときに英語を使って、またときには日本語を使って授業に参加します。どちらの言語を使っても問題ありません、中国語やスペイン語など自分が得意な言語をリソースとして補足的に用いることもコミュニケーションを図るうえで効果的と考えます。お互いが自分の持つ言語能力を生かしながら、つまり、臨機応変に工夫をしながら与えられたテーマについて考えるというプロセスが重要なのです。異なるバックグラウンドを持つ学生同士がディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを行うことは楽しいことばかりではありません。時に、アクティビティを通して相手に対する不満、摩擦、葛藤、困難さを体験することもあります。授業では、活動の後に振り返りの時間を設け、状況や相手に対するネガティブな印象を捉え直し、文脈の違いを理解する機会を持つようにしています。実は、このような「混ぜる教育」は APU においても実施されており、教育的な効果が高いことが明らかになっています。他者との出会いから創造する学びは立命館学園に共通する重要な教育目標と言えます。

▶ 多文化環境での経験を積むことによって、

多様性を尊重しながら課題解決に臨める人材を育成します。

さて、授業外において「混ぜる教育」を実践する場として、Beyond Borders Plaza (以下 BBP) があります。学生の言語・文化・専門性・回生等を超えた学びを促進するグローバル・コモンズという役割を持っています。BBP は、学生が気軽に集う場所であるということに留まらず、学生や教職員が自由企画を BBP において実施することができます。たとえば、2019年度に実施したイベントのなかには「LGBTQ フレンドリーなキャンパスを目指して」(2019年11月28日)「オーガニック農業について考える」(2019年12月3日)などがあり、性をめぐる多様な価値観やライフスタイルについて考える機

会を持ちました。語学学習、特色あるバックグラウンドを持つゲストスピーカーを招待しての座談会、日本語を学ぶ留学生と国内学生の交流企画、七夕やハロウィンなどの文化体験企画、留学生の日本語スピーチ大会などイベントは多岐に渡ります。キャンパスに居ながらにして、価値観の壁、国境の壁、文化の壁、言語の壁など、さまざまな border を越えてつながりを生み出し、ひいては多文化環境のなかで協働する機会を創出したいというのがねらいです。

最後に、海外留学の意義についても述べたいと思います。2018年度に立命館大学から海外の大学へ留学をした学生は2693名でした。2023年までに3,200名を送りだしたいと考えています。近年はフィンランド、スウェーデン、ノルウェーなど北欧諸国、ポーランド、ルーマニア、ハンガリーなどの東ヨーロッパ、シンガポール、インドネシア、タイなどアジア留学を目指す学生も少なくありません。留学先では英語に限らず、中国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、韓国語などを学習する機会があります。なぜ留学をするのか？その理由は、価値観の揺らぎを経験することなのではないでしょうか。外の世界に接触することで多様な価値に直面し、クリティカルな思考が生まれ、自分を内省する機会が生じます。それは、自分のなかの偏見、思い込み、価値を問い直すプロセスでもあります。また、留学中に、思うようにコミュニケーションが取れない局面において失敗や試行錯誤を経験するともの総合的な学びと言えます。「思うようにうまく行かない」経験自体を受け入れ、学びに昇華させていくことが留学の大きな意義だと考えます。そうして苦労して獲得した語学力だからそこ、留学後の就職活動においても価値があると重宝されるわけです。



大学院での学び

大学院では、知性や創造性を深め、社会で活躍するための実践的な学びが展開されています。こうした学びを通じて、研究者あるいは高度専門職業人として社会で活躍される人材を輩出しています。



理工学部 教授 市木 敦之

■ 大学院とは

「大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする」ということが、『学校教育法』（第99条）に規定されています。あわせて、大学院に入学することができる人は、大学を卒業した者、またはこれと同等以上の学力を有すると認められた者と規定されていますので、大学学部での専門教育の後、大学院で上記の目的のもとに学ばれた方は、研究者として、あるいは高度専門職業人として社会へ飛び立っていくことになります。その学術分野や専門分野のプロフェッショナルとして活躍されるわけです。

ところが日本では、大学院教育を受ける人の数が他の先進諸国でのそれと比べて少なく、これが国際競争力の低下につながっているのではないかと指摘されるようになりました。そのため、1991年に国の大学審議会から、大学院の量的、質的拡充化政策が答申され、これによって大学院学生が増えることになり、あわせて、大学での教育と大学院での教育のレベルが明確に区別されるようになりました。大学院への進学率が上がり、高等教育の主体が大学院側へシフトしてくると、理系などでは大学院まで進んで学ぶのが当たり前の風潮になってきます。たとえば海外では、社会の指導的立場にいる人の多くが博士の学位を持っています。

■ なぜ大学院なのか

みなさんは、なぜ大学へ進学しようと考えられたのでしょうか。大学から大学院への進学を考える際にも、同じ類の判断が求められます。プロ野球の高卒ルーキーと大学や社会人野球での経験を経た新人選手とを比べた場合を想像してみてください。卒業してすぐにこういう世界でこんな働きをするんだ、という明確なビジョンがある場合は別ですが、プロとしてその社会に出るまでに、できる限りのトレーニングと経験を積んで実力をつけられてから、即戦力ルーキーとして実践デビューしたいところです。今、高校球児として、あなたには即プロ入りか大学進学かの判断が必要です。さて、どうしますか？

大学院ではかなりの部分を特定の課題研究に取り組んで過ごしますが、修了後社会に出てから、大学院で研究したことが直接的に役に立つというのは、どちらかというと稀です。大学院生が研究を究めることと同時に、個人の応用力を高めることが大きな目的になっています。課題研究の成果もさることながら、大学院での学修を通じて、問題に対するアプローチの仕方や開発・解決の手順等の方法論を身につけることで、汎用性ある学識や能力といったものが獲得できるのです。

■ 立命館大学大学院の特徴

立命館大学大学院は、1950年に新制大学院として開設されて以来、これまでさまざまな変革と発展を

参考文献

- 酒井聡樹 『これから学会発表する若者のために』 共立出版 2008年
坪田一男 『理系のための研究生生活ガイド 第2版』 講談社 2010年

遂げ、現在では日本の私立大学として有数の規模と多様さをもったものになっています。大学の学部に対応する組織名称を大学院では研究科と呼称しますが、立命館大学大学院では、14の学部の上に設置された研究科と、特定の学部に基礎を置かない6の独立研究科があり、合わせて20の研究科で約3,200人の大学院生が学習・研究に励んでいます。これまでさまざまな分野において、世界を舞台に活躍する数多くの研究者や技術者を輩出してきており、現在では、毎年立命館大学大学院を修了して修士・専門職学位、博士学位を取得する人の数は、私立大学の中でトップクラスに入っています。

本学の大学院キャリアパス推進室では、大学院生が高い専門性や能力を身につけ、それらを活かして社会のさまざまな場所で活躍していく準備をするためのセミナー、相談会、講演会など、いくつものプログラムを実施するとともに、国際的研究や国際会議、学会発表などのための費用援助も行っています。こうした進路支援や学会活動の支援によって、大学院生が成長するだけでなく、本学の研究水準が高められ、それが世界に発信されています。本学での教育・研究の成果は、海外でも認知され、留学生は本学大学院生の概ね30%に達します。もちろん、英語での学修・研究を進め、英語で学位論文を作成することは、留学生であるかないかに関わらず珍しいことではありません。研究科での海外留学や海外研修プログラムも充実しており、キャンパスの内外で国際交流が行われています。

■ 大学院での学び

大学院での学びは、大きくは授業と特定の課題研究で構成されます。これらは、学部で学んだことをもとにして、知性や創造性を深める知的探求や、社会で活躍するための実践的な学びです。学問分野によってそれぞれユニークな課題研究が行われており、フィールド調査や実験、分析などに取り組み、まさしく昼夜を問わず研究に没頭する日々を過ごすことになります。キャンパスによっては、夜中でも不夜城のごとく煌々と灯りがついている研究室を見つけることができます。学部の授業補助をしてきているTA（ティーチング・アシスタント）は本学の大学院生ですので、実は身近なところで直接・間接に彼らの学習生活ぶりについて知ることができます。

企業やさまざまな公的・私的機関と共同研究プロジェクトを行う場合もあります。たとえば、企業から出された課題について、自らのアイデアをもとに課題の解決策を提案していきます。プロジェクトの計画と進捗については、企業と定期的なミーティングが行われます。こちらからの報告は、大学院生が自身の取り組みについて、整理して行います。知識として必要なことは文献を調べ、場合によっては実験を行って確かめて、ミーティングに臨みます。こうしたプロセスを通じて、専門知識の体系化が図られ、問題を解決したり新しいものを想像したりする力、また成果を発信していく力が身につけていきます。

■ あなたの未来へ

社会で活躍する場を仕事という極めて狭い捉え方でみても、そこには大学院で学んだ人にしかできない(できにくい)ものがあります。たとえば、国家公務員総合職などの採用試験は、大学院修了と学部卒では試験が異なりますし、民間企業でも、大学院修了を指定した求人があり、企画や開発部門の採用となると大学院修了が極めて優先されます。ですから、修士はもちろんのこと、博士の学位を得た場合でも、その後の進路は、教員や研究職に限ったものではなく、産業界など広く高度専門職業人として活躍する場があり、みなさんの未来への可能性は大いに広がっていきます。

■ 考えてみよう

- 大学を卒業してすぐの自分が、社会に対してどんな貢献が出来るだろうかと想像してみてください。
- 自分の学部に関わって高度な専門性を身につけると、将来どんな展望が開けるでしょうか。
- そもそも専門性って何でしょう？

立命館大学における研究

立命館大学はグローバル研究大学を目指しています。研究力の点で、立命館大学にはトップクラスの研究者が多数おり、多くの研究分野をリードしています。また世界に引けを取らない最先端の研究設備と研究環境も揃っています。



生命科学部 教授 岡田 豊

立命館大学の研究力

グラフは立命館大学の科学研究費助成事業(科研費)の採択件数、採択金額の推移を示したものです。科研費とは、研究者の自由な発想に基づく研究を発展させることを目的とする文部科学省および日本学術振興会の研究支援事業で、科研費の採択件数や採択金額は大学の研究力を示す指標として広く利用されています。

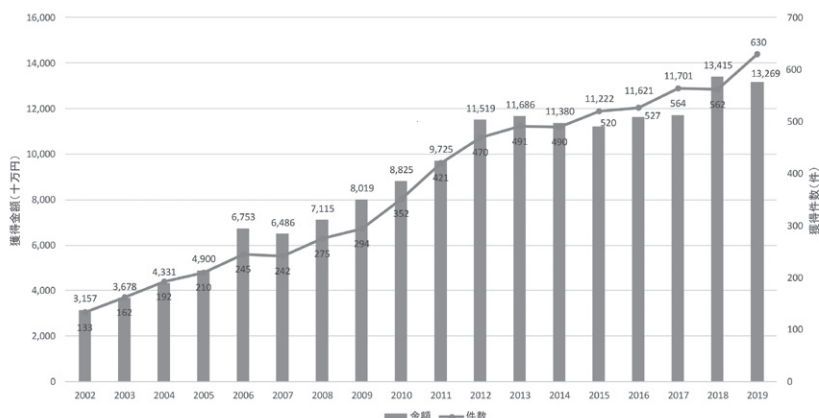


図1. 立命館大学の科研費採択件数と採択金額の推移

グラフが示すように、立命館大学は科研費の採択件数と採択金額ともに年々増加していることが分かります。2019年度も前年度と同様に約13億円の研究資金を科研費から獲得して最先端の研究を強力に推し進めています。全国順位においても、2019年度の採択件数、採択金額とも全国で23位に位置しています。全国順位には国公立大学も含まれていますので、私立大学だけで順位をみると、採択金額では慶應義塾大学、早稲田大学に次いで第3位、採択件数では、慶應義塾大学、早稲田大学、日本大学に次いで第4位にあり、研究大学として国内外から認知されていることが分かります。また、審査区分別にみると、65区分のうち9区分で採択件数全国10位以内を達成しています。

産学連携研究が盛んなことも立命館大学の特徴のひとつです。表は企業など、学外機関との共同研究、受託研究などの件数の推移を示したものです。表に示すように、件数は増加の一途をたどっており、2016年度は約8億円の研究資金を産学連携から得て社会に貢献する研究を推進しています。とくに2012年度、2014年度、2015年度には産学連携ランキングで全国第1位に輝いています。もちろんこの学外機

参考文献

立命館大学 研究・産学官連携 <http://www.ritsumeai.ac.jp/research/>

立命館大学 研究機構・研究所・研究センター <http://www.ritsumeai.ac.jp/research/center/>

立命館大学 研究者学術情報データベース <http://research-db.ritsumeai.ac.jp/scripts/websearch/index.htm/>

関との研究交流においても学部生と大学院生は重要な役割を果たしています。

表1. 産学連携による研究交流

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
産学連携件数	285	345	346	373	451	483	483	529	581	615	684	697

写真は、立命館大学の研究設備の一部を示したものです。ここではそれぞれの設備の詳細は省きますが、最先端の研究機器、研究設備が整っており、多くの大学院生、学部生がこれらの機器・設備を利用して、最先端の研究を行っています。

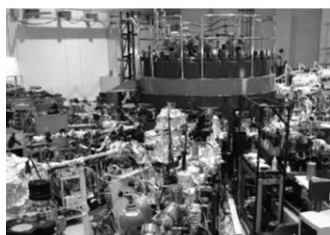


図2. シンクロトロン放射光施設



図3. MRI(磁気共鳴画像)撮影装置

立命館大学の重点研究

では立命館大学ではどのような研究が行われているのでしょうか。それぞれの教員個人、あるいはゼミや研究室を中心に行われる研究だけでなく、組織的にも研究は行われています。組織的な研究を支える環境として、本学には6つの研究機構、14の研究所、32の研究センターがあります(2019年12月現在)。そこでは、学部や研究科の枠を越えて研究者が集結し、特徴的な研究を推し進めています。なかでも総長が機構長をつとめる立命館グローバル・イノベーション研究機構(Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, R-GIRO)では、大学が重点研究として認めるプロジェクト研究が進行しています。この研究機構は、2008年に「持続可能で豊かな社会の構築」を目的として設立されました。近年、少子高齢化から派生する産業、政治、経済等の諸問題への対応が緊急の課題となっていることから、新たな中期目標を「少子高齢化に対応する生命力と創造性あふれる人間共生型社会モデルの形成」として、新学術領域の創成および新技術の開発とその成果の社会還元を推進しています。

もちろん、それぞれの研究プロジェクトには多くの博士前期課程(修士)と博士後期課程(博士)、そして専門研究員(ポスドク)など、若い研究者と研究者の卵が日夜研究に励んでいます。これを読んでいる皆さんもきっと興味のある研究テーマが見つかると思います。このように、本学では人類の未来を切り拓く研究、企業との共同研究など、社会の最前線で研究に携わる多くのチャンスがあります。そして、そのような最先端、最前線で活躍する若手研究者を育成する多くの仕組みが本学には整っています。

考えてみよう

- 自分の所属する学部や研究科の教員がどのような研究分野で活躍しているのか、著書や論文、科研費、学会活動など、学部・研究科のウェブページや研究者学術情報データベースを参考に調べてみよう
- 立命館大学の研究所や研究センターではどのような研究が行われているか、とくに自分の興味のある研究テーマを探して、その詳細を研究機構・研究所・研究センターのウェブページを参考に調べてみよう
- 自分のキャリア(大学卒業後・大学院修了後の進路)を想定して、求められる人材や資質、そのために必要となる学びや研究の分野を考えてみよう、さらにその学びや研究ができる環境や仕組みが立命館大学にどのように整備されているか調べてみよう。